

学位論文スタイル・ガイド

李, 一清
九州大学比較社会文化研究院

風間, 千秋
九州大学比較社会文化研究院

岩崎, 千恵
九州大学比較社会文化研究院

姜, 信一
九州大学比較社会文化研究院

他

<https://doi.org/10.15017/8688>

出版情報 : 比較社会文化. 13, pp.63-74, 2007-03-20. Graduate School of Social and Cultural Studies, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :



資料：学位論文スタイル・ガイド

本資料の作成には、李一清(助教授・大学院比較社会文化学府専任教員)、風間千秋(修1)、岩崎千恵(修2)、姜信一(博3)、宋珉鎬(研)、森勝馬(修2)、劉垂平(修2)、金慈恵(博1)、岩成俊策(博2)などが参加した。

ABSTRACT

This style guide is a result of cooperative work by Dr. Ilcheong Yi, Associate Professor, Graduate School of Social and Cultural Studies, Kyushu University and the students reading masters and doctors in the Graduate School of Social and Cultural Studies, Chie Iwasaki, Chiaki Kazama, Mori Katsuma, Jahye Kim, Yaping Liu, and Minho Song. It aims to provide the students writing theses and academic articles at the graduate school with a guide on quoting, citing and referencing. The main contents are based on the rules and regulations of the Japanese academic journal 'shakaigakuhyouon' and the style guides of University of Harvard and Oxford University. Authors will be pleased to have comments on this to improve the contents further.

本スタイル・ガイドは、大学院比較社会文化学府の学生に、論文の書き方に関する基本的な情報、特に先行研究を引用する場合、どのようにすべきかに関する基準と方法を提供する目的で作られた。

論文とは簡単に言うと、複雑な世界の現状と事物を明確に説明し、人間の知識と世界の発展に貢献するものである。この仕事をする人々が時空を超えて集まる場所を、学問世界と呼ぶ。学問世界にはこの世界の特徴的なルールと慣習、倫理があるが、そのうちの 하나가、先行研究の引用の規則と倫理である。時空を超えて協働しなければならない学問世界の人々は、他の研究者の研究について批判的な愛情を持って、相互尊重の念を持たなければならない。こうした尊重の念は、普遍的な規則で守られなければならない。このような、様々な研究者たちに存在する明視的な規則の一つが、引用の規則である。スタイルまたはスタイル・ガイドと呼ばれるこの引用の規則を設けることは、次の三つの理由で大変重要である。

第一は剽窃(Plagiarism)の防止である。学問世界では他人の論文を買うことや貸すこと、他人に論文を書かせること、原文を自分の論であるかのように書き直すこと、引用したことを明記せず他人の研究論文やインターネットの内容を自分の論文で使うことなどを剽窃といい、学問的犯罪行為として扱われている。もちろん一般的に共有されている情報などを利用する際は、引用の必要がない場合もある。

剽窃か否かを判断する際に最も難しい部分は、書き直しである。どのように書き直したら剽窃でなくなるかは非常に曖昧な部分であるがゆえ、客観的な基準は設けられていない。剽窃に対して厳しい規則を適用する欧米、特にフランス・イギリス・米国の学者たちは剽窃、特に研究論文の剽窃を防止するために、様々な規則を定めている。その規則のうち最も重要なものが、引用に関する部分である。専門家たちは剽窃を防止するためには、ア)引用する場合、必ず引用記号を付けること、イ)原著者と出所を必ず書くこと、ウ)出来る限り引用は短くすること、などを勧めている。剽窃の例として、外国の論文や本などの内容を翻訳し、引用したことを明記せずに使用する事例が挙げられる。フランスの小説家スタンダールも、イタリアの小説の内容を剽窃した疑惑があった(<http://www.france.co.kr/livres/plagiat.htm>, 2006.11.1)。

このような剽窃の危険は、新自由主義的な業績中心の学問世界の台頭、インターネットの発展とともに拡張された情報共有の空間等のために、日々増えている。どうすれば学問世界の倫理と秩序、紐帯意識を破壊する剽窃を抑止することができるのであろうか。もちろん研究者として、自分の学問的な信念と良心を持つことは最も重要だが、これ以外に引用の規則を詳細に設定し、論文を書く際に間違いを起こさないようにすることも必要である。

第二は、思惟の空間で自分の思考と他人の思考を区別し、

独創的な思惟空間を確立することである。「太陽の下で新しいものはない」という格言があるが、学問の世界では最小限、自分のものと他人のものがいかに相違するのかを明らかにする必要がある。区別を通して思惟の同志と論敵を探し、区別を通して共通の理論や主張を発見することができる。

第三は、時空を超えて価値のある学問発展のため、先輩、同僚、後輩の学問的努力に尊敬をあらわすことを通し、学問世界の豊かさを増やすことである。学問世界は何よりも、厳しい自己点検と管理が必要な世界であろう。これほど厳しい世界の研究者の力になるものは、同じ世界に集まった研究者たちだろう。自分の理論と主張との相違に関係なく、激励と支援は何より重要な資源である。研究者にとっての激励と支援とは、相互間の研究に対する認証である。引用は研究者の努力の認証を通じて、同じ世界に生きている人々への激励と支援をあらわすことであろう。

本スタイル・ガイドはこうした認識を持つ学生と教員が、大学院比較社会文化学府で研究する学生諸君に、微力ながら論文作成に助力となるために作成した。現在、様々なスタイル・ガイドが用いられているが、ここで改めて、スタイル・ガイドの重要性を喚起し、より使いやすいツールを提供することがその目的である。

本スタイル・ガイドは、次のガイドを参考として、主に社会科学と人文学分野で研究する学生を対象として作成された。基本になったスタイル・ガイドは日本社会評論のスタイル・ガイドであるが、他のスタイル・ガイドも参考し、一般的に使われているパソコンソフトの事情を考慮して、作成したものである。

前述したように、本スタイル・ガイドは様々なスタイルの中の一つであり、比文内では初の試みであるため、研究分野によっては適合しない部分もあるだろう。多くの助言と指摘を乞う次第である。

【参考】

社会学評論スタイル・ガイド

<http://www.soc.nii.ac.jp/jss/jsr/JSRstyle.html>, 2006.11.3.

Harvard Referencing 2006

<http://library.curtin.edu.au/referencing/Harvard.pdf>, 2006.11.3.

Oxford Style

http://www.usq.edu.au/library/help/ehelp/ref_guides/oxford.htm, 2006.11.3.

The Chicago Manual of Style

http://www.Chicagomanualofstyle.org/tools_citationguide.html, 2006.11.3.

1. 記述上の原則

1.1 わかりやすい文章

学術論文といえども、わかりやすい文章で書くことが必要である。わかりやすい文章を書くためには、ひとつのセンテンスは、できるだけ簡潔に短く書くことが望ましい。何行にも渡って句点が打たれない文章は避けたい。ひとつのセンテンスが何行にも及んだ場合には、いくつかのセンテンスに分解できないか再考したほうがよい。ひとつの段落が長すぎるのも望ましくない。段落が長くなった場合は、どこかで改行できないか再考したほうがよい。

なお、仮名遣いの点で必ず守らなければならないのは、ひとつの論文の中では一貫した仮名遣いをするということである。例えば、「したがって」と「従って」を混用してはならない。あるいは、「……のとおり」と「……の通りに」を混用してはならない。草稿を書き上げた段階で、検索機能を使って確かめてみることで、仮名遣いの混用を避けることができるはずである。

ただし、仮名遣いの混用が許される例外ケースとして、あまりに漢字が多く用いられている文章の中では、他では原則として漢字を用いていた言葉を、ひらがなで書くことが許される。逆に、あまりにひらがなが続いている文章の中では、他では原則としてひらがなを用いていた言葉を漢字で書くことが許される。

1.2 和文は全角文字、欧文および算用数字は半角文字

和文を書くときには、原則としてすべて全角文字を使用しなければならない。漢字、ひらがな、カタカナのみならず、句読点やカッコ記号なども、全角文字を使用すること（このルールの例外については、その都度述べる）。

ただし、欧文のアブストラクトなど、欧文を書く場合には、すべて半角文字を使用すること。その場合には、句読点 (punctuation, periods(.), commas(,), colons(:) and semicolons(;)) もカッコ (parentheses) も半角文字を用いる。そして、punctuation の後ろには必ず半角のスペースを入れる。また、カッコは、原則として、半角のスペースを取ってから用い、閉じた後には半角のスペースを入れる。

文中に欧文文字の単語を書くだけのときも、半角文字を使用する。例えば、NGO とはせずに、NGO とする。ethnicity とはせずに、ethnicity とする。

また、算用数字は半角文字を用いる。例えば、「1999年」とはせずに、「1999年」とする。なお、西暦年を表示する以外のときには、3桁ごとに半角の「,」をつける。例えば、「2,829,600円」。または、小数点を表示するときは、半角の「.」を用いる。

1.3 句読点

句読点は全角の「。」と全角の「、」を使うことにする。

読点の使い方には、必ずしも確立した規則はない。それだけに、読点の打ち方はむずかしい。あまりに読点の少なすぎる文章は読みにくいし、文意が伝わりにくくなる。逆に、むやみに不必要な個所にまで読点が打たれた文章も、読みづらい。目安としては、長めのセンテンスでは、主語の部分の後には読点を打つとよい。

なお、「」と句点を併用する場合の原則は、次のとおり。

- (1) 本文中に、「」付きの文章を表記し、文章がそのまま続く場合には、「……。」とはせず、単に「……」とする。つまり、閉じたカッコの前の句点は不要である。

正しい例：「社会事業の施設を緊切とするか」と問題が出された。

間違った例：「社会事業の施設を緊切とするか。」と問題が出された。

- (2) 本文中に、「」付きの文章を表記し、文章がそこで結ばれる場合には、「……。」ではなく、「……」。と閉じたカッコの後に句点を打つ。

1.4 算用数字と漢数字

横書きの文章の場合、数字は原則として算用数字「1, 2, 3……」を用いる。漢数字「一, 二, 三……」を用いるのは、「第一步」「一生」など、漢数字を使わないと不自然な場合に限る。

算用数字を用いるか漢数字を用いるかを見分ける方法は、その数字を任意の数字に置き換えられる場合には算用数字、その数字がそれ以外は通常用いられない場合には漢数字と考えればよい。「第一步」とは言っても「第2歩」とは通常言わない。だから漢数字を用いる。あるいは、「これが論点の一つである」とは言っても「これが論点の2つである」とは言わないので、「一つ」は漢数字を用いる（「ひとつ」とかな書きにしてもよい）。「第三者」や「第三世界」も漢数字だし、「一石二鳥」などの慣用句も漢数字を用いる。

もちろん、算用数字を用いるか漢数字を用いるかの判断のむずかしいグレーゾーンに属するものもある。例えば、「第一次世界大戦」「第二次世界大戦」は、固有名詞と考えるなら漢数字になるし、たんに世界大戦というものにナンバーをつけただけだと考えるなら、算用数字で「第1次世界大戦」「第2次世界大戦」と表記することになる。第1に「第2に」とするか、「第一に」「第二に」とするかも、好みの分かれるところであろう。このような境界領域の場合は、ひとつの論文の中で一貫性が保たれていればよい。

なお、年度の表記に際しては、元号と西暦を用いることを原則とする。西暦を先に、元号を後に表記する場合は、

例えば、1922年(大正11)というように、西暦の後に丸カッコを用いて元号年を表示する。また、元号を先に、西暦を後に表記する場合は、大正11年(1922)というように元号年の後に丸カッコを用いて西暦を表記する。

また、年代を表記する場合は、初出時においては、例えば「1970年代」と表記し、初出時から「70年代」というように略記してはならない。誤解のおそれがない場合には、再出時からは「70年代」と略記してよい。ただし、「'70年代」という表記はしない。

1.5 記号

まず、似たような記号を誤用しないことが大切である。特に「一」（漢数字のイチ）、「ー」（長音記号）、「-」（全角ハイフン）、「—」（全角ダッシュ）、「——」（全角2倍ダッシュ）、「-」（2倍ダッシュ）、「-」（欧文のハイフン）を、きちんと使い分けること。

なお、全角ハイフンは、原稿用紙のマス目に書いたとすれば、マスの両端に隙間があるものであり、全角ダッシュはマスの両端に隙間がないものである。

1.5.1 カッコ記号

カッコ記号にはさまざまなものがあるが、それぞれの一般的な用法は次のとおりである。

『 』：和文の書名や雑誌名には、二重かぎカッコをつける。なお、欧文の書名や雑誌名は、カッコはつけず、イタリック体とする。

「 」：和文の論文名には、かぎカッコをつける。また、本文中で短い引用をする場合にも、かぎカッコを用いる。その際、引用する文章中に「 」が使われている場合には、そのカッコは『 』に変える。

《 》：著者がある概念を強調したいときに、二重山カッコを用いてもよい。

[]：引用に際して、引用文に割り込む形で、引用者が補足説明を入れる必要があるときに、全角の亀甲カッコを用いてもよい。また、聞き取り資料などを提示する際に補足説明をする必要があるときにも、用いてもよい。

< >：引用文以外の、ひとまとまりの表現を表示する場合には、山カッコを用いる。

()：文章中に割り込む形で注釈を入れるときは、丸カッコを用いる。

1.5.2 その他の記号

ー：長音を示すときには、長音記号を用いる。例えば、「コミュニケーション」。なお、長音記号の代わりに、-（全角ダッシュ）や、-（全角ハイフン）を使わないように気をつけること。また、現状では、「アイデンティティ」と「ア

イデンティティー」というように2通りの表記法があるが、ひとつの論文の中では、いずれかの一貫性のある書き方をする（ただし、後述するように、引用の場合は自分の文章の表記法と異なっても原文のとおりとする）。

——：全角2倍ダッシュは、副題の前後につける。文章中に割り込む形で注釈を入れるとき、丸カッコの代わりに用いてもよい。ただし、—（全角ダッシュ1つ）の形では使用しない。

—：全角ハイフンは、対応するふたつの用語を結びつけるときに用いる。例えば、「差別—被差別の関係」。

・：ナカグロは、単語を並列的に並べるときに用いる。例えば、「在日韓国・朝鮮人」「政治的・経済的・文化的に」。また、欧文の言葉をカタカナ書きにすると、単語の切れ目に入れる。例えば、「エスニック・アイデンティティ」。

，：コンマの用法は必ずしも定まっているとは言えないが、例えば、次のような場合に用いると便利である。

文献リストに全集の類をまとめて記載するとき、出版年度が1995年から1998年まで毎年継続している場合は1995-1998と表記するが、1997年にはその全集の刊行がなかった場合には、1995-1996,1998と表記すればよい。つまり、出版年が飛んでいる場合に、その区切りを表示するために用いる。

／：全角スラッシュは、「彼ら／彼女らは」のように、単語を並列的にならべるときに用いる。この場合、ナカグロはandの意味であるのに対して、スラッシュはand／orの意味を持つ。「同性愛／異性愛の政治学」のように、いわば二項対立的な用語を並べるときにも用いられる。

著者名を記載するとき、日本人名とカタカナ書きの外国人名を併記しなければならない場合に、「杉本良夫／ロス・マオア」のような形で用いる。つまり、本来はナカグロを用いるべき個所であっても、併記される語句にすでにナカグロが用いられている場合に用いる。

……：三点リーダ2つは、聞き取り資料などを呈示する際に、語尾の部分などの不完全な表現や余韻を示すために使われる。また、引用文における省略を示すときにも用いられる。原文の中にすでにこの三点リーダが使われていてまぎらわしくなる場合には、引用の省略部分の表示は、（中略）としてもよい。ただし、……（中略）……とはしない。なお、三点リーダは1字分だけの…という形では使わない。また、・・・（ナカグロの連打）や…（ピリオドの連打）などで代用してはならない。

？：疑問符は通常の日本語の文章では使う必要はないが、聞き取り資料における疑問文を明示するような場合に用いてもよい。なお、？の後も文章が続く場合には、？と次のセンテンスとの間に半角のスペースを入れる。また、かぎカッコつきの文章で、「……？」となったときには、

「……？」。とはせずに、「……？」の後に句点を打つ必要はない。

！：感嘆符も通常の日本語の文章では使う必要はないが、聞き取り資料における感嘆文を明示するためなどに用いてもよい。注意すべき点は？の場合と同じ。

ルビ：ルビは、特別な読み方をする語句などの上につける。和文要約、本文、注において、読み方の難しい地名・人名などがある場合にも、初出時にルビの形でふりがなをつける。また、引用文において原文自体に誤字や当て字があったときに、（ママ）とルビを振る。

強調部分：ある語句を強調する際は、その語句を太字にする。

1.5.3 欧文用の記号

“ ”：欧文の論文名には、半角のダブルクォーテーションマークをつける。“ ”の中にさらに引用符が使われる場合には、半角の‘ ’（シングルクォーテーションマーク）を用いる。

- ：半角ハイフン (hyphens) は、単語を結びつける場合に用いる。例えば、middle-classfamiliesのように、数字と数字をつなぐときには、半角ハイフンを用いる。西暦の何年から何年までということを表示する場合（例えば、1952-1960）や何ページから何ページまでということを表示する場合（例えば、219-31）に用いる。

2. 注

注は、文脈上、本文中では記述しにくい、どうしても言及しておかなければならないことを述べるために用いる。単に文献の参照を求めるためには用いてはならない。だから注の数は少ないほうがよい。本文で説明可能なものは本文で書く。

注のつけ方は、本文中の当該個所に脚注・尾注番号を振る。カッコ記号と接続する場合には、「……」というようにカッコ記号の後ろの位置につける。句読点と接続する場合には、……、……。というように句読点の前の位置につける。

注は、ページの下、または、本文の末尾に1行あけて記載する。例示すれば、次のとおり（■は半角スペースをあらわし、□は全角スペースをあらわす。以下同様）。

脚注の例

……（本文）……

- 1) ■1984年5月25日改正の《国籍法》の第14条には、《国籍の選択》として次のように規定されている。（以下略）
- 2) ■在日韓国・朝鮮人は、通常、約70万人とされているが、この数字のあげ方には明確な基準が欠けている。というのは、……（以下略）

尾注の例

[注]

- 1) ■1984年5月25日改正の《国籍法》の第14条には、《国籍の選択》として次のように規定されている。（以下略）
- 2) ■在日韓国・朝鮮人は、通常、約70万人とされているが、この数字のあげ方には明確な基準が欠けている。というのは、……（以下略）

注番号の数字とカッコは半角文字とする。

3. 引 用

3.1 研究者名の表記

論文中で他の論者に言及する場合、初出時にはその氏名はフルネームで記載する。二度目からは姓だけでよい。ただし、ひとつの論文の中で言及する論者に同姓の者が複数いる場合には、二度目以降もフルネームで記載する。また、言及する氏名には敬称をつけないのを原則とする。もし、敬称をつける場合は、一定の基準を設け一貫性を保つ必要がある。

外国人の研究者に言及する場合は、以下のとおりである。

アルファベットで名前を表記する研究者は、アルファベットで名前を表記しその後ろにカタカナ読みで表記する。

漢字で名前を表記することができる研究者は漢字で名前を表記し、その後ろに自分が使うアルファベットを丸カッコ内に用いる。（例：韓国は国立国語研究院の韓国語ローマ字表記法、中国語はピンイン表記法を用いて表記する）

自分が使用するアルファベット名が無い場合は、自国のローマ字表記法により表記する。外国人研究者の場合も、二度目以降はファミリーネームだけとする（ファミリーネームをもたない民族の場合には、その人を代表しうる名前の部分を表記する）。

3.2 文献を示す割注

典拠した文献を示す注（以下、文献注と略記）は、本文中の適切な個所に、カッコ書きの割注で記載する。文献注のカッコは全角の丸カッコ（ ）を用いる。

文献注は、後述の文献リストと連動するものであり、（著者名、出版年）の形で表記する。著者名と出版年の間には、必ず半角コンマと半角スペースを入れる。例えば、Russell という著者が1991年に書いた本を取り上げた場合、半角コンマと半角スペースを入れないと、(Russell1991) となってしまう、わかりにくくなるからである。（Russell, 1991）であれば、見やすい。

文献注には、著者名は姓だけを記載する。ただし、ひとつの論文の中で参照する文献に同姓の著者が複数いる場合には、文献注の著者名は、漢字表記であれば氏名すべて、アルファベット表記であれば、ファミリーネーム、イニシャルとする。例えば、Alfred Weber と Max Weber の場合であれば、(Weber, A. 19xx), (Weber, M. 19xx) とする。

文献からの引用を行った場合には、（著者名、出版年、引用ページ数）の形で、必ず引用ページを明記しなければならない。

引用ページが複数ページに渡り、重複している位の数字がある場合には、その記載を省略する。ページ数の記載の省略の仕方には、The Chicago Manual of style が従来の方式と呼んでいる省略法と、簡素化された方式とがあるが、前者のルールはやや複雑であるので、後者の方式を採用することにしたい。簡素化された省略法の原則はただひとつ、後ろのページ数は前のページ数と異なる桁だけ表記することである。例えば、71-2, 100-4, 321-5, 600-13, 1100-23, 1536-8。なお、文献リストにおいて、初ページ-終ページを記載する必要がある場合にも、この方式による。

以下、文献注として想定されるさまざまなケースについて、例示しておく。

単著の場合は、（池田，1979），（Alejandro, 1998）。

ページ数も記載する場合には、（池田，1979，128），（Alejandro, 1998，371-3）。以下、ページ数を記載する場合には、同様にする。

同一著者の同じ出版年の文献が複数ある場合には、出版年の後に a, b…と小文字のアルファベットを順につけて区別する。（Goffman, 1961a）,（Goffman, 1961b）。

共著の場合は、（奥田・広田，1982），（Cohen and Arato, 1981）。和文の文献の場合は著者名をナカグロでつなぎ、英語の文献の場合は著者名は and でつなぐ（ドイツ語の文献の場合は und, フランス語の文献の場合は et 等々）。

共著者が3名以上の場合には、（高橋ほか，1965），（Zaldetal, 1995）。筆頭者（First Author 第一筆者）のみ記載し、「ほか」「et al.」をつける。

編書の場合は、(栗原編, 1996), (Halled, 1979).

編者が2人の場合は、(宮島・梶田編, 1991), (Johnston and Klandermans eds, 1995).

編者が3人以上の場合は、(船越ほか編, 1998), (Fitzpatrick eds., 2006)

同一著者の複数の文献を参照した場合には、(見田, 1979, 1984). 各文献の出版年の間は、半角のコンマと半角スペースでつなぐ.

異なる著者の複数の文献を参照した場合には、(奥田, 1983; 倉沢編, 1990; 高橋編, 1992). 文献と文献の間は、半角セミコロンと半角スペースでつなぐ.

上述の文献注の記載法は、これ自体、可能ながざり記載の簡略化を追求した結果だと考えられる。従って、この文献注の記載法においては、“ibid.”や“op.cit.”や「同書」「前掲論文」などを併用してはならない。

ただし、以上の文献注の記載法によるとかえって煩雑になる場合——例えば、学説研究などで同一文献からの引用頻度が非常に高く、かつ、原書と訳書双方のページ数を表示する必要がある場合——には、別途の記載法を考案してもよい。ただし、注などでその旨を明記すること。

例えば、Karl Marx (カール・マルクス) の『経済学批判要綱』について議論する場合を例示しておこう。

『経済学批判要綱』からの引用に際しては、原書はK. Marx, “Grundrisse der Kritik der politischen Ökonomie, Erster Teil” Marx/Engels Gesamtausgabe, Zweite Abteilung, Band 1, Teil 1, Berlin: Dietz Verlag, 1976を用い、訳書は、資本論草稿集翻訳委員会訳「経済学批判要綱 第一分冊」『マルクス 資本論草稿集①』大月書店, 1981を用いる。以下、(要綱第一分冊 Sxx 頁, yy)という形で、上記の原書のページ数と訳書のページ数を示す。

3.3 参 照

文献から直接の引用をせずに、他の研究者の業績に言及しただけの場合や、自分の言葉でまとめなおした場合でも、必ず文献注をつけなければならない。他の論者の業績に依拠した議論の部分と、自分自身の議論の部分を不明確にした形で論文を書くことは許されないことであり、剽窃の謗りを免れないからである。盗作は研究者として失格の行為であり、刑事処罰されなければならない。

このような場合の文献注のつけ方には、研究者名の直後につけるやり方と、言及が終わった所でつけるやり方がある。どちらの方式を採用しても構わないが、ひとつの論文の中では一貫した方式を取らなければならない。例示すれ

ば、次のようである。

見田宗介 (1979) によれば、……である。

見田宗介によれば、……である。(見田, 1979).

後者の方式をとる場合には、……(著者名, 出版年)とはせずに、……(著者名, 出版年). という形で文献注のカッコを閉じた後に句読点を打つ。もちろん、必要に応じてページ数を記載してもよい。

また、著者名(出版年)の記載の仕方は、読者にその文献の参照を求める場合にも見られる。ただし、文献注は、もともと本文の間に割り込む形の注釈であるので、下段の書き方は間違いであることに注意。

正しい例：この点については、見田 (1979) を参照されたい。

間違った例：この点については、(見田 1979)を参照されたい。

外国人の研究者に論及した場合には、次の方式とする。外国人研究者の名前をカタカナ書きする際は、英語表記の際と同様、ファミリーネームとラストネームの間にナカグロを入れる。

ジェフリー・ブロードベント (Jeffrey Broadbent) (1998) によれば、……である。

3.4 短い引用

文献から短い文章を引用するときは、本文中にかぎカッコ「」でくくる形で引用を行う。その際、引用する文章中に「」が使われている場合には、そのカッコは『』に変える。また、引用文が終わってかぎカッコをとじた後に、文献注をつける。

正しい例：……本文……, 「……引用文……」(著者名, 出版年, ページ) ……本文……。

間違った例：……本文……, 「……引用文…… (著者名, 出版年, ページ)」 ……本文……。

3.5 長い引用

文献から長めの文章を引用する——(全角2倍ダッシュ)引用文が数行に渡る——(全角2倍ダッシュ)ときは、前後各1行ずつあけ、かつ、左側を全角で2字分字下げして、引用であることを明示すること。引用部分を全角で2字分字下げするのは、引用文と引用文の間に短い本文が入る場合、全角1字分の字下げでは、引用部分と本文の行頭が揃ってしまうので、それを避けるためである。

引用文の記載の仕方を例示すれば、次のとおり。

□《社会心理》と《イデオロギー》が対になって用いられるときには、これらの語の意味は次のようになる。《社会心理》とは、一定の社会集団によって抱かれる、多様

な意見とか態度とか好悪の感情など、相対的にアモルフな（非定型な）意識をさし、《イデオロギー》とは、そのようなアモルフな社会心理が、特定の思想家の理論形成の営みによって整序され、結晶化された思想を意味する。この場合、《イデオロギー》は「観念形態」と訳される。

□□

□思想・理論・教義などを含む狭義の「イデオロギー」が知識階級を主体とした目的意識的な所産であるのに対して、「社会心理」は大衆的基盤における自然成長性をその特徴としている。（高橋、1965、333）

□□

□高橋は、続けてこう述べる。

□□

□そして、「イデオロギー」が首尾一貫した論理構造を持ち、社会成員の心意の方向づけを行なうのに対して、「社会心理」は衝動機構に緊縛されているため矛盾や非合理性を残留させながらも、社会の実質的エネルギーとして機能する。（高橋、1965、333）

□□

□いっぽう、《ユートピア》と《イデオロギー》とが対比されるとき、そこでは思想のもついわば方向性に目が向けられる。（以下略）

長い引用を行う場合の約束事は、次のとおり。

引用部分についても、最初の行頭および新しい段落の行頭は、全角1字分のスペースをとる。また、段落の途中からの引用であっても、冒頭に省略を示す……（三点リーダ2つ）を入れる必要はない。

この形式の引用においては、引用文の最初と最後にかぎカッコ「」はつけない。かぎカッコをつけないことで、引用文中の「」を『』に変える必要が生じない。

引用文の末尾には、必ず文献注（著者名、出版年、ページ）をつける。その際、引用文の句点の後に、改行やスペースをとらず、続けて文献注をつける。なお、長い引用の場合には、「……として機能する（高橋、1965、333）。」というように文献注の後に句点を打つのではなく、「……として機能する。（高橋、1965、333）」というように「引用文 ピリオド（文献注）」とすることに注意。

なお、注において、長い引用を行う場合には、前後各1行ずつあけることはせずに、注部分の通常の文章よりも、さらに左側を全角で2字分下げするだけでよい。

また、引用一般についての約束事は、次のとおりである。

引用文の原文が縦書きであるとき、原文で用いられている漢数字は、スタイル・ガイドの数字の記載法に従って、

算用数字に変える。ただし、史料などからの引用において、尺貫法などが用いられていて算用数字に置き換えることが不自然な場合は、漢数字のままでよい。

句読点についても、引用に際しては句読点をすべて「。」と「、」に揃える。

原文で旧かなづかいや漢字の旧字体が用いられている場合、引用に際しては、現代かなづかいと新字体に変えてもよい。ただし、注などで、「引用に際しては、旧かなづかいは現代かなづかいに、旧字体は新字体に変えた」旨を断ることが望ましい。

引用を行うにあたってもっとも大事なことは、原文どおりの引用をすることである。誤字・宛字・脱字などもそのまま転記し、当該語句にアンダーラインをし、すぐ後ろに【ママ】とルビを振らなければならない。従って、引用箇所については、必ずもう一度原文にあたって、引用の際の書き写しの間違いがないかどうかを念入りにチェックすること。引用文は、論文執筆者自身とは別の人によって書かれたものである。それゆえ、句読点のつけ方やかなづかいが異なる場合が多い。横目で原文を見ながらパソコンに入力していくときに、引用間違いがおこるのが当たり前なのだ。従って、引用間違いがありうることを前提に、プリントアウトした原稿と原文を照らしあわせながら入念なチェックをしなければならない。

大学院生が起こしやすい間違いでは、文献注に対応する文献が文献リストに見られなかったり、文献注での出版年と文献リストでの出版年にズレが見られることである。また、著者名や書名・論文名の記載に間違いが見られるケースも多い。従って、文献リストの作成にあたっては、引用文の場合と同様に、細心の注意を払う必要がある。

3.6 フィールドワーク資料からの引用

聞き取り調査による資料、エスノメソドロロジーにおける会話分析のデータ、参与観察によるフィールドノーツなどの資料からの引用の場合も、前述の「短い引用」もしくは「長い引用」の書き方に従う。ただし、文献注ではなく、資料からの引用文の末尾に注をつける。なお、同一資料から頻繁に引用をする場合には、初出時に一括して注をつけてもよい。

例示すれば、次のとおり。

□ NSが暮らすA県では、公立学校の教員の“国籍条項”は撤廃されており、わずか2名だけだが在日韓国人が正式採用されている。その意味では、教師になりたいという彼女の夢は、まったく実現不可能ではない。ただ、問題は彼女の親の意向だ。

□□

□親が許してくれるなら、できるかぎり、先生になれるように頑張っていきたいと思うんですね。母親は、私の年ぐらいで結婚もしないで仕事してるというのは、恥ずかしい、って。いまでも、「恥ずかしくて、親類の人にも言えへんから、頼むから〔産休代替教員の仕事を〕辞めてくれ」って、そればかり。

□□

□彼女のもうひとつの夢であり、悩みの源泉でもあるのは、恋愛問題である。

そして、注を書く。例えば、次のとおり。

□)■ NS は、1964年生まれ、韓国籍の在日3世である。
□□ 5人の姉妹の長女。聞き取りは、1989年7月27日に行った。

また、聞き取り資料の提示というよりも、あるインフォマントから得た情報を本文中に記述するような場合には、当該個所に注をつけてその旨を表示する。例えば、次のとおり。このような場合には、氏名に敬称をつけても構わない。

□5)■ この点については、1993年3月1日に、在日韓国青年会中央本部会長の金京必氏から口頭で教示を得た。

なお、フィールドワークをととして入手した団体や個人の発行したパンフレットの類からの引用に際しては、文献リストに記載するとともに文献注をつける。

3.7 新聞記事などからの引用

新聞記事や商業雑誌などからの引用の場合は、次のとおり。

『新聞名』、年月日、朝刊・夕刊、面を記載する。例えば、(『朝日新聞』、1998.11.3、朝刊、2面)や、(『西日本新聞』1998.11.11、夕刊、1面)。出典を注記するだけでよく、文献リストに文献としてあげる。記名記事の場合は、論文を引用する場合と同様の形で、記者名を明記する。例えば、(荒井信一、『朝日新聞』、1998.11.3、朝刊、2面)。ただし、版や地域によって記事掲載の有無や内容、掲載位置が異なることがある(特に地方版の記事の場合)。従って、必要と思われる場合には、朝刊、夕刊の区別だけでなく、(『〇〇新聞』、1999.3.15夕刊、第〇版、〇〇県版、〇面)のように、より詳細な情報も記載するとよい。

発行年月日の記載については、1998年11月3日であれば、日本語の新聞・雑誌の場合には、1998.11.3のように、「年

月日」の表記の代わりに半角のピリオドを用い、英字の新聞・雑誌の場合には、新聞名、月、日、年の順で記載する。例えば、(The New York Times November 3, 1998)のように記載する(他の言語による場合は、その言語に一般的な年月日の表示をするか、日本語の場合と同様にしてもよい)。

4. 文 献

4.1 文献リスト

本文中で言及もしくは引用した文献は、漏れのないようにすべてを文献リストに記載しなければならない。逆に、文献リストにあげられた文献は、必ず本文中に対応する文献注がなければならない。

文献の記載法にはさまざまな方式があるが、このスタイル・ガイドでは、欧文の文献であれ和文の文献であれ、原則として記載事項の間はコンマで区切り(一部コロンを使用する。また、煩瑣を避けるために和文の文献の記載では不要なコンマは省略する)、文献記載の末尾にピリオドをつける方式を採用したい。

文献は、[尾注]の後に、やはり1行あけて、[文献]という見出しの下に、和文の文献も欧文の文献も含めてすべての文献を列挙する。尾注のスタイルをとらず、脚注を使用した場合は、ページを改める。リストアップは、著者または編者(共著・共編書の場合は筆頭者 Firstauthor)の姓のアルファベット順に記載する。日本人の著者の場合は、五十音順とする。韓国・朝鮮人、中国人の著者名については、著者本人のアルファベット表記によるが、不明の場合には、各民族名の標準的なアルファベット表記法に従えばよい(韓国・朝鮮人の場合は、韓国の国立国語研究院の表記表に従う。中国人の場合には、ピンインとする)。

なお、ひとつの文献に関する書誌情報を記載し終えるまでは、途中で改行することなく、続けて入力すること。ひとつの文献の記載が複数行に渡るときは、2行目以降は全角で2文字分下げする。

また、同一著者の複数の文献を記載するときは、2つ目以降の文献の表示には、氏名の代わりに、——(4倍ダッシュ、和文の場合は全角2倍ダッシュ)を用いる。

同一著者の文献に、単著のほか、編書や、その著者が筆頭者となった共著や共編書がある場合には、単著、単独の編書、共著、共編書の順にリストアップする。なお、同一のカテゴリーに複数の文献がある場合には、出版年の早いものから順に記載する。さらに、同一著者の同一カテゴリーの同一年度の文献が複数ある場合には、1991a, 1991bなどと、出版年の末尾に小文字のアルファベットを順につけて区別する。

大学院生が起こしやすい間違いでは、文献注に対応する文献が文献リストに見られなかったり、文献注での出版年と文献リストでの出版年にズレが見られることである。また、著者名や書名・論文名の記載に、間違いが見られるケースも多い。従って、文献リストの作成にあたっては、引用文の場合と同様に、細心の注意を払わねばならない。

4.2 欧文の文献

欧文の文献の記載にあたっては、すべて半角文字（欧文モード）で入力すること。以下、さまざまなケースについて、ハーバード・スタイルを準用して、次のように記載法と例を示す。

4.2.1 書籍について

次の順番に従って記すこと。

- ① 著者の名前
- ② 出版・発行年
- ③ 出版物の名前、もしあれば副題（すべての題目はイタリック体）
- ④ 題目のシリーズと、個々の巻数
- ⑤ 改訂であればその旨を表記
- ⑥ 出版社
- ⑦ 出版地

ア) 著者が一人のとき

Berkman, R. I. 1994, *Find It Fast: How to Uncover Expert Information on Any Subject*, Harper Perennial, New York.

イ) 著者が2名もしくはそれ以上

Moir, A. and Jessel, D. 1991, *Brain Sex: The Real Difference Between Men and Women*, Mandarin, London.

ウ) 著者が機関や団体

Queensland Tourist and Travel Corporation, Market Research Department 1991, *An Examination of the Effect of the Domestic Aviation Dispute on Queensland Tourism*, Queensland Tourist and Travel Corporation, Brisbane.

エ) シリーズ

Simons, R. C. 1996, *Boo! : Culture Experience and the Startle Reflex*, Series in Affective Science, Oxford University Press, New York.

オ) 改訂版

McTaggart, D., Findlay, C. and Parkin, M. 1995, *Economics*, 2nd edn, Addison-Wesley, Sydney.

カ) 書物の中に収録されている章や部分であるもの

Bernstein, D. 1995, 'Transportation planning' in *The Civil Engineering Handbook*, ed. W. F. Chen, CRC Press, Boca Raton.

キ) 著者や編集者が不明の場合

著者が書かれていない場合、その題が参考文献のはじめの要素となる。その文献の題の一番初めにくるアルファベットを使用し、順に並べる。

CCH Macquarie dictionary of business 1993, CCH Australia, North Ryde, New South Wales.

4.2.2 記事について

次の順に従って記すこと。

- ① 著者の名前(苗字, 名前のイニシャル・ミドルネームのイニシャル.)
- ② 出版年
- ③ 記事の名前, シングルクォーテーションマーク (' ')
- ④ 雑誌の題名 (イタリック体か下線を引く)
- ⑤ 巻数
- ⑥ 発行刷番号
- ⑦ ページ番号

ア) 機関紙の記事

Huffman, L. M. 1996, 'Processing whey protein for use as a food ingredient', *Food Technology*, vol. 50, no. 2, 49-52.

イ) 会議などでの報告書

Bohrer, S., Zielke, T. and Freiburg, V. 1995, 'Integrated obstacle detection framework for intelligent cruise control on motorways', IEEE Intelligent Vehicles Symposium, Detroit, 276-81.

ウ) 新聞記事

Simpson, L. 1997, 'Tasmania's railway goes private', the Australian Financial Review, October 13, 10.

4.2.3 インターネットやその他の電子資料

これは、インターネットから使用可能な資料や電子ジャーナルを含む。参考文献として記載する場合のリスト形式は、以下のとおり。

- ① 著者の名前 (苗字, 名前のイニシャル・ミドルネームのイニシャル.)
- ② 出版年
- ③ 発行物の題
- ④ 発行者／構成者
- ⑤ 発行刷番号
- ⑥ 媒体物の種類
- ⑦ 名前もしくはサイトアドレス
- ⑧ データを検索した日付

Weibel, S. 1995, 'Metadata: the foundations of resource description' D-lib Magazine, [Online] Available at: <http://www.dlib.org/dlib/July95/07weibel.html> (Accessed in the December 25, 1995).

4.3 その他の外国語文献

英語, フランス語, ドイツ語以外にも, さまざまな言語——(全角2倍ダッシュ) 中国語, 朝鮮語・韓国語, ロシア語, アラビア語等々——(全角2倍ダッシュ)による文献がある。それらについては, 「欧文の文献」および「和文の文献」を参考にして, 執筆者の責任で文献の記載をしてほしい。

4.4 和文の文献

和文の文献の記載にあたっては, 出版年と巻号およびページの数字と一部のカッコ記号を入力する以外は, 句読点は全角文字で入力すること。

著者名などの氏名の記載法については, 姓と名前の間にスペースを入れない。中国人などの漢字表記による氏名も同様にする。

以下, さまざまなケースについて, 記載法と例を示す。

4.4.1 単著の本

著者名, 出版年, 『タイトル——サブタイトル』出版社名。
稲上毅, 1981, 『労使関係の社会学』東京大学出版会。
真木悠介, 1977a, 『現代社会の存立構造』筑摩書房。
——, 1977b, 『気流の鳴る音』筑摩書房。

小熊英二, 1995, 『単一民族神話の起源——日本人の自画像の系譜』新曜社。

書名には二重かぎカッコ『 』をつける。なお, 本の判が新書や文庫であっても, 例えば, 中公新書や岩波文庫とは書かずに, 中央公論社, 岩波書店などと, 出版社名を記載する。

書名にサブタイトルがあるときは, タイトルとサブタイトルの間は, ——(全角2倍ダッシュ)でつなぐ。論文にタイトルをつけるときは, サブタイトルの前後に2倍ダッシュをつけるが, 文献リストを記載する際には後ろのダッシュは省略する(論文名にサブタイトルがある場合も同様とする)。なお, 文献の奥付けでのサブタイトルの記載において, スペースや: (コロン)などの記号が用いられている場合でも, 2倍ダッシュでもってサブタイトルの表示をする。

また, 講座名など, 必ずしもサブタイトルとは言えない語句と書名とが併記されている場合は, 例えば, 『講座社会学12 環境』という形で, 基本的には奥付けに記載されたままを記入し, 各語句の間に半角のスペースを入れる。(新版)

〔第2版〕などの書誌情報も同様に扱う。

4.4.2 共著の本

筆頭者の氏名・共著者名, 出版年, 『タイトル』, 出版社名。

宮島喬・梶田孝道・伊藤るり, 1985, 『先進社会のジレンマ』有斐閣。

杉本良夫／ロス・マオア, 1995, 『日本人論の方程式』筑摩書房。

共著者の氏名はナカグロでつなぐ。ただし, カタカナ書きの外国人名を含む場合には, ナカグロに代えて, 全角のスラッシュを用いる。

4.4.3 編書

編者名編, 出版年, 『タイトル』出版社名。

高坂健次・厚東洋輔編, 1998, 『講座社会学1 理論と方法』東京大学出版会。

編者名や編者団体の後に「編」の字を入れる。

4.4.4 編書論文など

著者名, 出版年, 「論文のタイトル」編者名編『本のタイトル』出版社名, 論文の初ページ-終ページ。

船橋晴俊, 1998, 「環境問題の未来と社会変動——(全角2倍ダッシュ) 社会の自己破壊性と自己組織性」船橋晴俊・飯島伸子編『講座社会学12環境』東京大学出版会, 191-224。

論文のタイトルにはかぎカッコ「 」をつける。論文のタイトル中に「 」が使われている場合には, そのカッコは『 』に変える。末尾にページ数を記載する。

また, 共著の本に収録された論文についても, 同様に記載する。

著者名, 出版年, 「論文のタイトル」共著者名『本のタイトル』出版社名, 論文の初ページ-終ページ。

高橋徹, 1965, 「日本における社会心理学の形成」高橋徹・富永健一・佐藤毅『社会心理学の形成』培風館, 317-505。

4.4.5 雑誌論文

著者名, 出版年, 「論文のタイトル」『雑誌名』巻(号), 論文の初ページ-終ページ。

佐藤嘉倫, 1998, 「合理的選択理論批判の論理構造とその問題点」『社会学評論』49(2), 188-205。

巻号は, 第49巻第2号であれば, 上の例のように, 巻数の後に続けて半角の丸カッコ内に号数を記載する。巻(号)の後に半角コンマと半角スペースでつないで, 論文のページ数を記載する。なお, 巻号の代わりに, 第〇号, 第〇集, 第〇輯などを用いている場合にも, その号数のみを記載すればよい。巻号によって刊行されている雑誌のページ数の

記載にあたっては、当該雑誌の号によるページ数ではなく、その巻を通してのページ数を記載する。同じ巻でのページ数の重複による混乱を避けるためである。

また、原則として雑誌論文の場合は出版社名（発行元）を記載する必要はないが、雑誌名だけでは発行元がわかりにくいときは、次のように『雑誌名』の後に発行元を記載する。

著者名，出版年，「論文のタイトル」『雑誌名』発行元，巻（号），論文の初ページ-終ページ。
桜井厚，1993，「ライフヒストリー調査雑感」『三色旗』慶應通信，549(2)，11-4。

4.4.6 翻訳書・翻訳論文

翻訳書・翻訳論文はそのまま記載する。必要があれば論文で使用した欧文表記スタイルによって原書を記載する。

なお、共訳の場合は、訳者名の間はナカグロでつなぐ。

これまでに説明してきたところを適宜組み合わせれば、ほとんどのケースの文献の記載が可能なはずである。なお、出版年が不明な場合は、出版年の代わりに nd と記載する（nd は nodate の略語である）。近刊の文献の場合は、出版年の代わりに、和文の文献であれば「近刊」、英文の文献であれば forthcoming と記載する。稀なケースについては、適宜、他の文献記載法を参照されたい。

4.4.7 調査報告書

研究代表者名，刊行年，『研究課題名』○○年度科学研究費補助金研究成果報告書，研究機関名。

神原文子，1999，『同和地区における子育ての現状と課題に関する実証研究』1996-1998年度科学研究費補助金研究成果報告書，相愛大学。

研究代表者のほかに研究分担者がいる場合には、研究代表者名の後に「編」をつける。研究実施の年度の表記は、上記の例のように元号でなく西暦に変える。科学研究費によるもの以外の調査報告書の記載についても、これに準ずる。

4.4.8 政府刊行物など

編集機関名，出版年，『タイトル』発行元。
経済企画庁，1994，『国民生活白書（平成6年版）』大蔵省印刷局。

静岡県，1972，『第8次静岡県総合開発計画』静岡県庁。
政府刊行物については、発行元が「大蔵省印刷局」であるときは、上記の例のように発行元を記載する。

地方自治体などによる刊行物の場合で、編集元と発行元が同一のときにも、発行元を記載する。

4.4.9 修士論文や学会報告原稿など

修士論文や博士論文を文献として利用する場合は、例えば次のような記載の仕方をする。

著者名，学位取得年，「論文のタイトル」○○大学大学院○○学研究科○○年度修士論文。

学会の大会における報告を文献として利用する場合は、例えば次のような記載の仕方をする。

報告者名，大会開催年，「報告のタイトル」学会名，開催地。（学会で発刊された論文集があればページを記載すること）

4.5 電子メディア情報

インターネット上のホームページの情報を文献として利用したときは、著者名，公表年または最新の更新年，「当該情報のタイトル」URL，アクセス年月日。

宮野勝，1997，「社会調査の参考資料ガイド（入門編）」
<http://syajyotamacchuo-uacjp/miyaken/cyosahtml>
(1998.12.10)。

通常の文献の記載において「著者名」にあたる項目には、当該情報の著者名を記載する。当該情報の著者とそのホームページの製作主体が異なる場合もありうるが、その場合も著者のほうを記載する。

「出版年」にあたる項目には、当該情報の公表年または最新の更新年を記載する。いずれも不明の場合には、アクセスした年を記載すればよい。

「論文のタイトル」にあたる項目には、そのホームページ全体の名称ではなく、当該情報のタイトルを記載する。

当該情報に直接アクセスできる URL とアクセス年月日を記載する。一般にホームページは頻繁に更新されることがめずらしくないので、アクセスの年月日を記載する必要がある。

CD-ROM，フロッピーディスク，DVD，MP3などの視聴覚資料を文献として利用した場合の記載は、書籍に準じるが、末尾に CD-ROM，フロッピーディスク，DVD，MP3，ビデオテープ，録音テープなどであることを明記する。例示すれば、次のとおりである。

日本公共政策学会，1998，『公共政策——日本公共政策学会年報』1（CD-ROM）。

5. 形式上の注意事項

論文提出の際、表題紙、和文要約、見出しと小見出しに対しては、大学院比較社会文化学府の提出規則に従う。以下、その他の形式上の注意事項について述べる。

5.1 図表

表には、表1、表2などと順に番号をふり、表頭中央に以下のように題名をつける。

表1 帰化への願望に対する諸要因の影響力の強さ		
設問番号	内 容	ベータ係数
SEX	性別	.009
AGE	年齢	.005
問5	本人の達成学歴	-.043
問7	成育地域内同胞数	-.036
問9 g	両親の民族意識の強さ	-.183
問11 a	受けた民族教育の程度	-.178
問31 a	被差別体験の程度	.026
問40 b	民族団体への参加経験	-.260
問46 g	父親の職業階層	-.076
*はP<.05で有意 N=591 R ² =.251		

図には、図1、図2などと順に番号を振り、図頭中央に以下のように題名をつける。

図4 「在日」若者世代のアイデンティティ	
朝鮮人の被抑圧の歴史への重視度	
強	
II 祖国志向	I 共生志向
日本社会における	
強	
自己の成育地への愛着度 弱	
III 個人志向	IV 帰化志向
弱	

【この図の例示では、タテ・ヨコの罫線が消えています。】

なお、データ類を他の文献からそのまま引用する場合には、図表の下部に「出典：厚生省人口問題研究所 (1998)」のように、引用した文献を典拠として示し、その文献を文献リストに記載すること。他の文献のデータ類をもとに執筆者が集計・加工した場合には、「厚生省人口問題研究所 (1998) をもとに作成」などと記載する。出典を明示しなくてよいのは、独自に収集したファーストハンドのデータをもとに作成した表や独自のアイディアによって作成した図の場合などに限られる。また、図表の読み方などについて必要な注をつける。

なお、地図や写真を使用する場合も、図表の記載法に準ずる。

5.2 数式

数式における変数やパラメータなどはイタリック体とする。また、乗除は*や/による表記をなるべく避ける。長い数式は、行頭に全角2字分のスペースをいれ、前後をそれぞれ1行あける。数式が多くなる場合は、番号をつけて区別する。

5.3 尾注と文献

尾注は、本文の末尾に、1行あけて、[注]の見出しの下にまとめて記載する。

文献は、尾注の記載が終わった後に、1行あけて、[文献]の見出しの下に記載する。

5.4 読みなおし

読みなおしの際には、特に以下の点に注意すること。(1)一貫性のあるかなづかいをしているか、(2)さまざまな記号を正しく用いているか、(3)注番号と文末の注の記載とが符合しているか、(4)引用文に間違いがないか、(5)文献注と文末の文献リストに間違いがないか。

『比較社会文化』第巻 () ～頁
Bulletin of the Graduate School of Social and
Cultural Studies Kyushu University
vol () pp～

資料：学位論文スタイル・ガイド